

サザエの沈黙

昨夜店先でチューと鳴いたのが縁で

魚が沢山生えたのとれみを帯びたのとペアで買い込んだ

苦いワタの味を忘れられない僕の

二の上ない餌食になるのだ

生きながら網に載せて可哀想だが火あぶりだ

醤油の香りの漂う中君らは美味しい壺焼きとなる

一杯の焼酎に看取られながら

君らは僕の満足顔に睦れ上がった胃袋に

黙って落ちこんで行った

男と女なのだろうか

ペアのサザエの貝殻はゴミ袋に投げ込まれる寸前に

僕に拾い上げられた

突っ張った奴と波に洗われ磨り減ってれなくなった奴なの
だろうか

今は僕のパソコンの横に声もなく並んでいる

店先と同じように僕に毎朝呼びかけて来る

波の音が聞え潮の香りが漂ってくる

ガラガラした岩のような肌を撫で

オハヨウと声をかける

僕も突っ張ったり磨り減ったりしながら

肌の艶も失せだんだん土に近付いているよ

今日も一日よろしくねと言っても

君らはムスツと黙りにくってる

僕も沈黙に走り込んで行く

(2007.2.19)